

10月

主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら
主よ、誰が耐ええましょう。

しかし、赦しはあなたのもとにあり

人はあなたを畏れ敬うのです。

わたしは主に望みをおき

わたしの魂は望みをおき

御言葉を待ち望みます。

わたしの魂は主を待ち望みます

見張りが朝を待つにもまして

見張りが朝を待つにもまして。

(詩編 130・3〜6)



10月1日

主は真実のぶどうの木

ヨハネによる福音書・15章1〜15

ぶどうの木は普通の木と違います。普通の木は幹が太くて、枝が茂っても自分で立っています。でもぶどうは幹が細く、それに比べて枝がずっと長いのです。ですから自分で立っていることができません。主イエスの時代、イスラエルでは、ぶどうの木は地面を這っていた、と言われていました。そこになる実を、人々は腰をかがめて収穫したのです。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。わたしにつながるでないさい、そうすればあなたがたは豊かに実を結び」と主イエスは言われました。こういう言葉は、説明抜きで、そのまま受け止めた言葉です。

この間、わたしが牧師になる前に働いていた会社の人と、久しぶりに会いました。その後、そのうちのひとりがメールをくれました。会社をやめて、牧師になる道を選んで、どうだったか、と書いてありました。わたしの人生がどうだったかは、まだ途中経過ですから結論は出ていません。しかしひとつだけ思うことがあります。それは、もしこの教会がなかったら、もしここで主イエスと出会わなかったら、自分は今頃どうなっていたらどうか、ということです。まったく違った人生だったに違いありません。そして自分がこゝへ導かれて本当によかった、

と感謝しています。これは教会生活をしておられる皆さん方の多くが抱かれる思いではないでしょうか。

主イエスにつながる、ということとは、教会に来続ける、ということことです。そこで語られる御言葉を聞き続ける、ということです。御言葉がわたしたちの流れ込んで、実を結ばせるのです。だから、教会を離れたらいけないのです。ある牧師さんがこういうことを言いました。教会を離れてもしばらくは元気でいられます。でも長続きはしません。必ず信仰を失います、と。主イエスは、わたしにつながる如果不能ければ、外に投げ捨てられて枯れてしまふ、と言われます。わたしたちは滅ぶのです。

先週、教会員のSさんのお葬式をしました。八十七歳でなくなつたのですが、この方は七十歳の時に洗礼を受けたのです。わたしはこの方が使っておられた聖書を貸していただいて、目を通して、驚きました。どこも真っ赤に線が引いてあるのです。よく調べて見ると、それは礼拝や聖書の会で語られた箇所でした。たぶん、聞いてから、線を引きながら自分で読み直したのでしよう。お葬式の最後に、遺族がこういう挨拶をされました。この方の晩年は、教会に通い、交わりの中にあることと、聖書のお話を聞くことを楽しみにしていた日々でした。教会のおかげで、本当によい人生でした、と。

主イエスは言われます。わたしはまことのぶどうの木、あなたがたはその枝である。わたしにつながるでないさい。そうすれば豊かに実を結びます、と。

10月2日

海が陸地になった

出エジプト記・14章21～31

民族としての自分たちの歩みを決定した出来事として、イスラエルがいつも帰っていくところがあります。それは出エジプトと呼ばれる出来事です。エジプトで奴隷であった彼らが、そこから解放されて自由になった、という出来事です。

旧約聖書の申命記の二十六章に、イスラエルの古い信仰告白が書いてありますが、それによれば、彼らはもともと放浪生活をしてきたアラム人の一族でした。それがエジプトへ下り、エジプト王朝の保護を受けて、強い大きな民へと成長したのです。エジプトは一時、ヒクソスというセム系の民族の支配を受けた時期があり、イスラエルがエジプトで保護を受けたのは、その頃であったと言われています。

しかしヒクソスの王朝は紀元前十六世紀に倒されて、エジプト人の王朝が復活しました。新王朝のもとでイスラエルは奴隷にされ、激しい労働に苦しむ日々が続くようになったのです。

そこから彼らは脱出するのですが、それを指導したのが、神さまから遣わされたモーセという八十歳の老羊飼でした。彼はエジプト王ファラオと何回も激しい交渉を続け、その間神さまが起こされた様々な不思議な出来事もあって、王はし

ぶしが彼らを解放することに同意するのですが、一旦は解放しながら、後で思い返して兵隊に彼らを追跡させるのです。

エジプトの兵隊に追われて逃げるイスラエルの前に立ちちはだかったのが紅海でした。しかし絶体絶命と思われた時に、紅海の水が分かれて真中が陸となり、イスラエルはそこを通過して脱出したのです。

この出来事によってイスラエルは、全能の神さまの力を骨身にしみて体験しました。そしてそれが彼らを全く新しい民に造り変えたのです。イスラエル(神が支配したもう)という名をもつ信仰の共同体に。

わたしたち品川教会もまた、同じ経験をしてきました。そこに神の民・教会としてのわたしたちの原点があります。

10月3日

聖徒の交わりを信じる

口マの信徒への手紙・12章 1〜21

教会には共同体としての交わりがあります。礼拝もその後の集會も、交わりのひとつです。そういう形での交わりを理解することは難しいことではありません。

しかしわたしたちは毎週「聖徒の交わりを信じる」と告白しています。今日に見えている交わりが全てであるならこういふ告白はあり得ません。これはこの交わりの中に、目に見える形を超えて、聖徒の交わりが存在することを信じる、ということなのです。

「聖徒の交わり」にはふたつの意味があります。ひとつは聖なるものとの交わり、の意。もうひとつが聖なる人の交わり、です。これらは互いに深い関係があります。聖なるもの、イエス・キリストとの交わりの中に、聖徒の交わりが成り立つからです。

あなたがたの体を、すなわち生活全部を、生きた聖なる供えものとして献げなさい、とパウロは語ります。それが礼拝である。ここに教会の交わりがあります。これはわかるのです。しかし何となく息がつまりそうな気がします。そんなことが可能かと思うのです。でもパウロは、神のあわれみによって、それを勧めると言います。そういうわたしたちの状

態を充分知り抜いておられる神さまの、それでもわたしたちに注がれる愛と期待によって、この勧めが可能になる、ということです。

教会の中でこれが実現すれば、いろんな賜物が用いられることになります。ある者は預言、ある者は奉仕、教え、勧め、寄付等々。これら全体が教会を支えます。ちょうど「ライブランド」の入口にあるミツキーマウスの絵のようです。一本一本の花が集まって大きな絵を描くのです。自分は黄色、だけど赤がよかつた、とか、自分よりあの花の方が目立つのはしゃくだ、とか考えます。でもそんなことは問題ではないのです。全体として何の絵を描いているかが問題なのです。

教会の交わりは主イエス・キリストの絵を描くのです。ひとりひとは欠けたところの多い者であっても、全体として聖なるものを描き出す。ここに聖なるものとの交わりに支えられた、聖徒の交わりが存在するのです。